



敬愛する秋田のスポーツ指導者

佐藤忠男先生・加藤廣志先生・嘉藤晋作先生

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)

令和元年にあたり、私がこれまで少年時代から野球と関わりを持つなかで影響を受けた「秋田のスポーツ指導者」のうち、その代表として3名の先生を敬意と感謝を込めてご紹介させていただくことにした。先生たちの言動や行動、ちょっとした一言から「信じられないような勇氣と力をもらえる」ことを体験した。人を動かし、その気にさせるには、口先だけの技術指導ではなく「本気の想い、愛情、情熱」が必要なのも知った。また、「スポーツが人として成長するうえで、かけがえのないものである」ことを再確認することにもなった。

元秋田工業高校 ラグビー部監督 佐藤忠男 先生

「サッチュウ先生」の愛称で親しまれた佐藤忠男先生は、秋田工業高校の教師として、30年間ラグビー部を指導され、全国大会、国体で20度の日本一に導いた。最近では私立高校の台頭などにより、全国制覇から遠ざかっているが、全国のラグーマンにとって憧れである「花園」を舞台にして、秋工高は最多出場校であり、最多優勝校である。秋工高ラグビー部の歴史は、そのまま高校ラグビーの歴史でもある。

その背景には、人を育てることに常に愛情と情熱を傾け、信念を頑なに守り、指導し続けた佐藤先生の存在があることは言うまでもない。当時、ライバル校の選手として対戦した内藤徳男さん（後に男鹿工高ラグビー部監督）は、著書のなかで「高校時代、秋工高の紫白のジャージを見るのもイヤだった。スクラムを組んだ瞬間、怒涛のごとく押しつぶされ、いつも紫白のジャージの下敷きになっていた。紫白のジャージを着て突進する姿は、鎧で身を固めた戦国武将のような勇壮さだった」と語っている。そこには、佐藤先生に鍛えに鍛えられた部員の姿があり、秋工高ラグビー部の強さの原点がある。「精魂尽くして颯爽たり 顧みるときの微笑」のスローガンは今もしっかり受け継がれている。佐藤先生のラグビーへの熱い思いを理解し、伝承し続けているOBたちの存在も大きい。

佐藤先生は、中学校の先輩で私の家の近くに住んでおられ、当時はバイクで通勤されていた。私が中学生時代、朝のランニングをしていると、わざわざバイクを止め、「かづやくん（捷也）頑張れや！」と声をかけていただいた。先生の一言が、私の野球に挑戦する大きな力になっている。ガッチリとした体格、西郷隆盛を彷彿させる鼻筋の通った彫りの深いお顔は、なぜか今でもしっかりと覚えているから不思議である。「サッチュウ先生」は秋田県が誇れる、日本を代表する指導者である。（平成18年10月26日 76歳で逝去）

元能代工業高校 バasketボール部監督
加藤廣志 先生

元能代工業高校 バasketボール部監督

加藤廣志 先生

加藤廣志先生は教員生活38年間のうち、能代工業高校で33年間を過ごし、Basketボール部監督を務められ、30年間で全国制覇33回という偉業を達成し、黄金時代を築いた。

先生に最初にお会いしたのは、20年ほど前に先生にご講演を依頼するためにお伺いした時

だったように記憶している。ご挨拶もそこそこに、不躰にも「なぜ、こんなに長く勝ち続けることができるのですか？」とたずねると、先生はすかさず「三浦さん、自分が本気になれば、生徒は必ず本気で応える。だからこちらが本気になればすべてが変わるんだよ…」と言われた。先生のこのお言葉は、自室の目の届くところに今も飾っている。地元の中学校の講演会の冒頭で次のようにも語っておられた。「毎日、子どもたちと会うのが楽しくて仕方がなかった。あの子には、明日こんなことをやってやりたい。そう思うと夜明けが待ち遠しかった。とにかく、子どもたちの成長していく姿を見たいと思っていた。でもね、誰でも必死に頑張っても芽の出ないときがある。そのとき、その子のそばに行き、声を掛けてやるんだ」と。この人を育てることを最優先する先生のバスケットへの思いが「バスケの街・能代」につながった。そこに「勝敗、競争」を超えたスポーツの価値、神髄がある。

何度かご一緒させて頂いたが、子どもたちの話になると、いつも感情が移入し、涙ぐむ。その表情から、先生の人並みはずれた愛情の深さと人間性の高さを感じた。裏表のないまっすぐな生き方、打算を捨て、選手を大事にする指導が選手の心を動かすのだろう。そこに、能工高の強さの秘密がある。コートを離れ、ワイン片手にスポーツを語る柔和な笑顔が忘れられない。

(平成30年3月4日 82歳で逝去)

グリーンスポーツ倶楽部 会長 嘉藤晋作 先生

嘉藤晋作先生は、昭和10年生まれの84歳。昭和31年から34年の4年間、日本体育大学の選手として箱根駅伝に出場された。卒業後は帰省され、秋田南高校、秋田北高校などの体育教師として教鞭を執った。

私は40数年間、小学生の野球と関わってきたが、我々の団員にも先生から「スポーツと走ることの大切さ」について指導していただきたいとの思いで、発足当初から冬期練習の一環として、毎年指導をお願いしてきた。先生は常に子どもの天賦を引き出し、個性や良いところをみつけ、「スポーツの楽しさ」、「走ることを通して心を育てる」ことに腐心されていた。先生の楽しく、わかりやすい指導を受けた子どもたちは、「走ること」に興味を持ち、中高生となり、陸上競技に挑戦し活躍している団員も多い。

昨今の勝利を殊の外至上するスポーツ環境の中で、常にスポーツのあるべき姿を追い続け、ブレずに自分の信念を貫き通している魅力的なスポーツマンであり、教師であり、指導者である。その背景には大学時代4年間、「箱根」に挑み、たつぷりと修羅場を体験した真の強さと優しさがある。だから先生の言動・行動には説得力がある。先生は三島由紀夫の身体論に共感し、現在もトレーニングを継続し、鋼の身体を維持している。定年後は「こころと身体を元気に」の考えから、「グリーンスポーツ倶楽部」を結成した。同クラブは50歳から80歳までの方が参加され、会員は200名を超えている。また、平成24年には個人として文部科学大臣賞を受賞された。

なお、私が高校3年間、野球部で指導して頂いた山谷喜志夫監督については、本誌2018年7月号のコラム「100回目を迎える夏の甲子園」のなかで若干紹介させていただいたので、本稿では割愛するが、山谷さんと過ごした高校野球は私の生きるための根幹を形成し、心のなかで脈々と息づいている。高校野球は私の心のふるさとである。